

幕末・明治初年来日のフランス人建築家

澤 護

今春、日本仏学史学会の月例会の席にて上記の表題で口頭発表をした。取りあげたフランス人建築家は、来日した順でいえばクリペ、バスチャン、ピヨン、レスカス、ボアンビル、サルダーのわずか6名に過ぎないが、これらの人物について記述されたものはほとんどなかっただけに、少しは関心を払ってもらえたようであった。

いまだ調査過程のところが多いが、今までのところこの程度まで調べが終っているという意味で記録することにした。不備な点が数多くあることは十分に承知しているが、別の観点から一層の肉付けが行なわれることを期待し、呼水ともなれば幸いである。日仏交渉史、建築関係の研究者が共にひとつの土俵に上がって調査を進めれば、日本における洋風建築の変遷などの面について、大きな成果が得られるはずである。

ルイ・フェリックス・フローランについては、彼が1893年（明治26）に勲四等旭日小綬章を贈与されたことにより、その叙勲議案などから日本に於ける彼の業績等はかなり知ることができるので、本稿では特に著しい功績のあった洋式燈台について付記の形で書き留めておくことにした。

クリペ（L. F. Clipet）

クリペの来日はいまひとつはっきりしないが、1864年暮れのことだったと思われる。これには、来日直後に出したと考えられる次の新聞広告がある。

「 公告

下記の者、横浜地図の製図者、兼フランス公使付き建築家は、あらゆる建造物の設計・企画につきまして、即刻ご要望に応じられるよう用意万端整えておりますことを、当地の居住者の皆様に謹んでお知らせ致します。

又、建築中の工事監督をも請け負います。

建築家 クリペ

本町通り 51番

横浜、1865年1月19日¹⁾」

幕末時、来日した欧米人が居留地内で店舗を開いたり、なにか商売を始めようとする、まず新聞に広告を掲載して宣伝することが一般的であり、またクリペの広告としてはこれが最も早いものだけに、1864年暮れの来日と判断して大きく誤まることはない。先の新聞広告にある「本町通り51番」だが、1865年1月当時この地番では「タイクーン・ホテル」（大君ホテル）が営業していたので、クリペの住いが決まるまで一時期このホテルに暫定的に滞在したものであろう。その後、まもなくして彼は171番の一角で、建築・設計の事務所を開くようになるからである。

1865年クリペは駐日二代公使レオン・ロッシュの命を受け、横浜居留地の地番を示す地図「横浜絵図面」を描いた。この図面は、1865年5月15日付けのクリペの署名を持ち、ロッシュに贈られたものが現在残されていて（横浜開港資料館蔵）、当時の横浜居留地の地番を決定する際の貴重な資料となっている。

1865年に入り、横浜弁天にフランス公使館の建造が始められ、翌1866年2月に石造り二階建てベランダを持つ公使館が完成した。この公使館には、1877年6月に横浜裁判所が移転することになるが、ロッシュはフランスの富と力を象徴するための鉄製の門を本国より送らせ、新公使館の威容

を高揚したのであった。

この公使館を設計し、工事の監督に当たったのがクリペであったが、彼は、1866年中に帰国してしまうため、他に設計・建築した建物は知られていない。

彼が横浜居留地で住んだ地番は、新たに埋め立てられフランスに貸し与えられた地所の一角171番Aであった。この171番の家屋は1866年11月9日に公開入札にかけられたが、居間や食堂を含め9室もあっただけに、かなり余裕のある暮らしぶりであったことがわかる。

横浜居留地には、居留民の安全を守るためなどの自治体があり、この自治体は参政権のある各国代表よりなる参事会によって運営されることになったが、この参事会のフランス側代表は4名で構成され、クリペはそのひとりでもあったから人望も厚かったものとみえる。因に、1864年末の横浜居留地の欧米人の総数は309名で、フランス人は52名であった。

1868年夏クリペは再来日した形跡があるが、1866年11月の家財処分の際には、彼の使用していた食器類、大切にしていた建築関係の書籍、ポニーなどをも売りはらっただけに、²⁾再び日本の土を踏むことはないと考えていたに違いない。

1866年11月18日、クリペはフランス郵船の「デュプレックス」号に乗船して横浜を後にしたが、同船には遣露使節の小出大和守一行も乗船していた。

クリペの滞日期間はわずか2年弱でしかなかったもので、日本における活動を示す記録は極めて少なく、また名前にしてもL. F. クリペの他にF. C. クリペとしたものもあり、フル・ネームの確認もしなければならない。いずれにしろ、最も早く来日したフランス人建築家が、このクリペであった。

バスチャン (Edmond Bastien)

バスチャンに関しては、すでに記述したことがあり、³⁾それに付け加える

べき新しい資料等の発見もほとんどないので重複するところが多いが、参考にしてくださる利用者の便を考慮し、ここに再掲載することをお断りしておきたい。

横須賀製鉄所の船工兼製図職工として雇用されることになったバスチャンは、1866年3月12日（慶応2年1月26日）に建築課長として来日することになったレノウ、泥工頭目のデュモンらと共に来日した。バスチャンの雇用日は慶応元年12月3日（1866.1.19）より明治2年2月17日（1869.1.19）までの3カ年となっているが、この雇用日の慶応元年12月3日は、彼がマルセイユを出港した日で、このようなマルセイユ出発日をもって雇用日としたのは、お雇いフランス人では多勢いた。

バスチャンの初年度の月給は75ドルで、以後80ドル、90ドルと昇給したものの意外に低かったのは、製図職という職種と来日時26歳という若い年齢とにあったものであろう。1869年1月20日の契約満期のあと、彼は月雇いで横須賀製鉄所に雇われたが、この間に富岡製糸場の設計依頼を受け、これを完成させた。

「（明治3年閏10月）十三日杉浦権正尾高少佑ブリュナ氏ト俱ニ東京ヲ発シ富岡ニ到リ村ノ西南城址ト字ナスル処ヲ相シ土人ヲ諭シテ飯ル乃チ土木構造ノ意匠ヲブリュナ氏ニ囑シテ仏人バスチャント云建築工ヲ雇ヒ其図ヲ作ラシム官員臨判十二月二十六日ヲ以テ図成ル⁴⁾」

この記録によると、バスチャンは富岡製糸場首長のポール・ブリュナの依頼を受けて、富岡製糸場の設計図を完成させたわけだが、当時横須賀製鉄所雇いの身分であり、しかも製鉄所内に居留していた者が、どのようにして図面を極く短期間で完成し得たのかといった面に大きな疑問を投げかけられたことがあった。

しかし、月雇いのバスチャンに対して、製鉄所側が富岡製糸場を管轄す

る大蔵省に、一時出向とか嘱託という形で表向き許可を与えたとすれば問題はなく、また図面の作成は現地・富岡で実践されなくとも、横須賀で製図されていたとしても別に不自然ではない。

また、設計図の依頼から完成まで少なくとも70日はあっただけに、はたして図面完成には短かすぎる日数だったものなのであろうか。いずれにしろ、明治3年12月26日(1871.2.15)に図面が完成したのは間違いなかったはずで、これをみた上で、ブリュナがフランスへ明治4年1月22日(1871.3.12)に、フランス人技術者と製糸場に必要な各種機械の購入のため、横浜を発った日にちとも合致する。

記録の上では、バスチャンは明治4年12月より明治5年7月まで富岡製糸場にいたことになっている。

「(明治4年)十二月大蔵省ノ嘱託ニ因リテ上州富岡製糸場ノ建築ニ従事セル造船所月雇仏人バスチャンハ製糸場ノ任期满チテ本年(5年)七月二十三日横須賀ニ帰着シ次デ解雇帰国ヲ出願シタル⁵⁾」

しかし、首長ブリュナが2名の製糸検査役と4名の製糸工女を連れてフランスより戻ったのが明治4年11月8日(1871.12.19)であったから、少なくとも彼らの住居や製糸工場の一部は建築が成されていたはずで、この場合であればバスチャンは明治4年12月より前に富岡製糸場と関わっていたという推定も大いに可能である。

富岡製糸場が竣工されて、明治5年7月に横須賀に戻ったバスチャンは、そのまま依願帰国を願いでて、それが赦され規定の旅費を受けとってフランスへ帰国したことになる。だが、当時の入出国を示す乗船名簿の中に彼の名前はみあたらず、おそらく日本に留まったものと想定される。

いずれにしろ、1874年には横浜の居留地162番で建築業を手がけていた

フランス人・ピヨンの家に居住し、ここで働いていたのである。ことによったら、横須賀を去ったあと帰国することなく、横浜に居留していたと考えてよさそうである。

1875年4月5日、バスチャンは営繕寮に月雇いで雇い入れられ、東京西久保八幡町7番地に住んだ。この年の12月1日より正式に営繕局雇いとなり、月給150円が支給され、音羽町⁵の天徳寺・随養院（現在の興昭院）に居住した。バスチャンが工部省営繕局をいつ解雇されたものか記録はないが、1879年（明治12）12月までここに雇用されていたとみなされる。ただし、1879年後半から1881年にかけては先の西久保八幡町に再び転居し、1880年にはここで建築・工事・製図請負の看板をだしているだけに、いまだこの時点で営繕局と関係があったものか定かでない。

1881年（明治14）11月7日、東京より横浜に戻ったバスチャンは、居留地128番に建築設計の請負、建築見積り、工事監督請負など建築工事一般の事務所を開業した。しかし、この事務所の経営は軌道にのらなかったものとみえ、2年ほどでこの店を畳んでしまった。この間におけるバスチャンの設計・建築とわかる建造物は、残念なことだがひとつとして確認されていない。

1883年（明治16）にバスチャンは横浜を離れ、上海にあったフランス工部局の設計・工事監督者として働くことになった。このフランス工部局には、彼の旧知の仲間が大勢いて、また富岡製糸場首長だったブリュナも上海に居留していた時だっただけに、落ち着き充実した生活だったに過ぎない。彼はこの地で結婚し、一子をもうけていることから、そのことが窺われるのである。

1888年（明治21）6月7日、バスチャンは妻と子を伴って、上海より横浜にやってきた。この来日の理由は不明だが、この時の身分はいまだフランス工部局監督であったから、妻と子にかつて自分が住み働いた地をみせるといった観光旅行だったと思われる。

幕末・明治初年来日のフランス人建築家

バスチャン夫妻はホテル住いをする事なく、横浜はかつての同僚で建築事務所を開いていた居留地162番のピヨンの家に身を寄せた。ここで病に臥したバスチャンは、この年の9月9日に帰らぬ人となり、山手の墓地に埋葬された。バスチャン49歳の壮年であった。後に残されたバスチャン夫人と子供は、かつての同僚であったサルダーに伴われ、この9月16日に淋しく横浜を後にした。

横浜山手外人墓地にバスチャンの碑がある。その墓碑は永い年月の間に風化され、やや鮮明さを欠くが、次のように刻まれている（原文はフランス語）。

日本を去っていたバスチャンの墓がなぜ横浜にあるのか、また上海在留のフランス人によってどうして彼の碑が建てられたかの疑問があったが、その理由これまでの記述で明らかになったはずである。

「エドモン バスチャン

1839年6月27日

ラ・マンシュ県シエルブール生まれ

1888年9月9日

横浜にて逝去

上海フランス会」

ピヨン (François Pilon)

1869年に来日したピヨンは、横浜居留地174番に店を開き、1874年に同162番に移転すると彼の逝去する1892年までこの地番で設計・建築事務所を開いていた。

20年以上に渡って横浜に居住したピヨンだが、彼の設計した建造物は全く知られていない。1889年の「グランド・ホテル」の増築に際し、同ホテルの設計者となったポール・サルダーに加担したらしいことが知られるに

過ぎない。⁷⁾これは、ピヨンが公共施設の企画・設計に加わることなく、専ら居留地内の商社等の家屋の設計に力を注いでいたからであつたろう。

公的な記録では、工部省営繕寮に1876年9月1日より造家職工長として月給100円で無期間で雇い入れられたが、どのような理由によるものか、翌1877年2月28日に暇をだされている。⁸⁾したがって、ピヨンの官雇いは半年という短期間で終わった。

ピヨンの所有する地所となった162番は510坪というかなり広い敷地であつたから、陸軍省に雇われ、1877年に解雇されたヴィエスト（Antoine Viest）がこの地所の一部を借り受け、同年4月23日に蹄鉄業を開いたりしていた。

余談になるが、1879年10月16日にヴィエストが経営する鍛冶屋の裏手にあつた馬小屋より出火し、ヴィエストの家屋とこれに隣接するピヨンの木造家屋二棟が灰燼に帰した。それでいながら、一週間後の10月22日にはヴィエストの鍛冶屋は営業が再開されるという手際の良さをみせている。これは、ピヨンが焼けたあと直ちに再建に取りかかったからであつたが、ピヨンはこういった家屋を建てるといった大工職に腕を振るつたから、彼の設計・建築した建物が記録に残らないのもやむを得ない面がある。

なお、横須賀製鉄所を解雇されたバスチャンが一時期身を寄せ、さらに後に死去したところもピヨンの家であつたのは記述した通りである。

レスカス（Jules Lescasse）

レスカスに関しては、既に「西郷従道邸とレスカス」と題し記述したことがあるが、⁹⁾新しく発見した記録も若干あるので、これらを付け加えながら改めて書き示しておく。

レスカスは、1869年8月31日にフランス郵船「ラブールドンネ」号に乗船し、香港を経由して来日したものとみなされるが、この時の乗船名簿には「Lucase」とあるため完全に把握したとはいいがたいところにある。し

かし、1871年秋には神戸居留地の江戸通りと北町通りとの交差する一角の90番に居を構えている。1869年8月に来日したとすれば、1871年秋までの約2年間、レスカスはいったいどこに住み、なにをしていたかの疑問が残る。

1872年10月、新橋・横浜間の鉄道が開通したが、1870年3月よりまず汐留からダイアックらによって測量が開始された。この時の測量に関しては、「川崎新橋間を設計するは英国技師ゼー、ダイアック氏にして、川崎横浜間は仏国技師¹⁰⁾ジェーレスカー氏なり」という記録がある。レスカスが川崎・横浜間の設計に参加したことを示す資料は他に知らないが、このように記述されている以上、なんらかの裏付け資料があつてのことだろう。この証言が正しいとすれば、1869年に来日した後の空白は説明がつく。

1872年に神戸に居留中、どのような交渉がもたれたものか、明治5年3月より9月までの半年間、土質家（地質家）という資格で、生野銀山に月給300円という高給で迎えられている。レスカスが生野を去ったのは明治5年9月のことで、太陽歴になおすと1872年10月中のことであつたから、雇い入れられたのは1872年4月ということになる。ことによつたら1872年5月1日（明治5年3月24日）より、1872年10月31日（明治5年9月29日）までの雇入期間だった可能性もある。

工部省・鉾山寮・生野銀山は、鉾山師長で明治新政府のお雇い外国人の第一号となつたコワニエが最高責任者であつたが、レスカスが雇用された期間、彼はフランスへ医師と職工の雇い入れ、鉾山に必要な諸器械の購入のため離日していたので、レスカスの雇用については直接には関与していない。なお、レスカスの雇用に関しては『工部省沿革報告』にしかみられないが、同書で「レス・カース」と書かれているのがもちろんレスカスのことである。

レスカスが生野にいたことは確実で、これには「加藤（正矩）氏への想い出、1872年10月3日（明治5年9月1日）、生野、レスカス」と自筆署名

の入った一葉の写真が残されている。

このレスカスの写真は、コワニエ夫人・マリーが生野を去る際に、自分たち夫妻と生野で働いたお雇いフランス人の肖像を集めた小さな写真帳を記念として置いていった中の一枚で、この写真帳の扉の裏面に「私の可愛いルイ・加藤ちゃんへの思い出に、ママン・コワニエを忘れないように」と、別れの言葉がマリー夫人の手で認められている。

「ルイ・加藤」とは、1871年当時31歳であった土質家デュニ・セボース (Denis Sevos) と、セボースのもとに奉公にきていた日本人女中・きよとの間に生まれた男の子で、1871年5月の誕生であった。セボースは月給570円（因にレスカスは300円）という破格の高給で迎え入れられていたが、ルイが生まれたことでフランスに帰国させられ、母親のきよも生野を追われた。

両親と無理に裂かれたルイは、セボースらと親交のあった鉱山寮一等技手・少属・加藤正矩の長男として戸籍に入れられ、静太郎と名付けられた。たまたま、コワニエ夫妻には子供がなく、ルイこと静太郎は五歳になるまでコワニエ夫人の手で育てられ、夫人が自らママンと写真帳に綴った理由がここにある。

コワニエ夫妻は、1872年10月5日（明治5年9月3日）フランスより横浜を經由して兵庫に到着し、そのまま生野に向った。丁度、レスカスが写真の裏面に署名をした頃である。

レスカスが明治5年3月から9月にかけての短期間、しかもコワニエが一時帰仏中に生野銀山に雇い入れられた理由は、生野・猪野々谷に建つ瀟洒な異人館、つまりコワニエ夫妻のための住い、コワニエが連れてくることになっていた医師オーグュスタン・エノン (Augustin Hénon) の住居の建築のために雇用されたもので、猪野々谷に建ち並ぶ二階建てベランダを持つ洋風家屋がレスカスの手によって設計・建築されたのであった。

生野を後にしたレスカスは、兵庫を經由して1872年10月27日に横浜に着

き、日本で最初のフランス語新聞を発行していた居留地183番の「エコー・デュ・ジャポン」の一角に土木設計・建築の看板を掲げた。その後、彼の建築事務所は転々と移転し、1874年には176番、1875年8月には85番へと変わり、この年の12月より翌1876年6月までの半年間フランスに一時帰国し、この間パリのステルラン社と契約を結び、同社の建築用金具類の一手販売をすることなどを決めたりしていた。

1876年6月6日、横浜に戻ったレスカスは本町通り61番に事務所を開き、ここで錠、蝶番といった金物類の注文にも応じていたが、居留地の中心街ともいえるべき61番には、オクシデンタル・オリエンタル郵船会社やカーティス・ホテルがオープンされるといった時期にぶつかり、レスカスの事務所は翌1877年1月2日より、やはりフランス人の経営する「オリエンタル・ホテル」のある84番の裏側に移転し開業することになった。

通称クラブ・ストリートといわれた居留地84番に開かれた事務所は1878年まで続くが、この間あとで触れる建築家のサルダーと一緒にいたことがある。日本および中国における唯一の代理店と宣伝して配付した金具類の一覧「建築用金物類代価附雛形」¹¹⁾（3丁、Tarif de la Serrurie）が残されているが、これが84番時代のものであった。

1876年から1878年頃にかけて、レスカスが設計した建物はいくつかある。いまだ十分に確認できていないものもあるが、そのいくつかを記録しておきたい。

1876年に起工した永田町の陸軍省の建物は、おそらくレスカスの設計になったものとみられる。正面玄関入口の上にベランダを持つ二階建ての陸軍省は、写真や銅版画で当時の姿を偲ぶことができるが、レスカスの手になったものと断定するところまで十分な資料の集積はできていない。しかし、その外観の様式からみて、まずレスカスの作とみなしてよいだろう。

陸軍省とは別に、陸軍省参謀本部も同じ頃に建築され、これもレスカスの設計ともいわれている。しかし、華麗なこの三階建ての参謀本部は、陸

軍省の建物の外観とはあまりにも違いすぎ、レスカスではなく、工部美術学校教師として雇い入れられたイタリア人・カッペレッティとするのが正しい。

横浜居留地には早くからイギリスやフランスの病院が開業されていたが、これらの国に続いてドイツも1878年6月1日に横浜山手（Bluff）の40・41番に、ドイツ帝国海軍病院（Kaiserlich Deutsches Marine-Lazareth）を開業した。この病院は1876年12月の暮れにまず起工式が行なわれ、1年数カ月をかけてこの木造兼煉瓦造りの建物は完成したが、この設計・監督をしたのがレスカスであった。¹²⁾

明治初年の山下町居留地の借地料は100坪につき28ドル弱であり、一方、山手の方はわずか12ドルという低借地料であったが、それでも不便な崖の上というこの地に住もうとするものは少なかった。この山手の40・41番は合せて2,434坪の地所で、1874年当時はドイツ官事取扱地所として貸し与えられていたところであった。

この地所にドイツ病院が開かれたのは1874年末のことで、当時はプロシア病院と呼ばれ、後にドイツ帝国海軍病院、ドイツ海軍病院と呼ばれていった。ドイツが開いた病院であったから、同国の軍人や民間人の患者が多かったのは当然だが、ドイツ以外の国の患者も入院することができ、1911年12月31日に閉鎖されるまでの30有余年間の患者数は3,357名を数えた。横浜にあったドイツ海軍病院はもちろん、フランス海軍病院などの沿革を示す記録はほとんどないが、当時の新聞などから丹念に記事を拾い集め、地道な調査が行なわれない限り、永遠にこれらの病院は陽の下に現われることはないであろう。

このドイツ帝国海軍病院が建設される頃に、新しいフランス領事館の建築の計画がまとまり、領事館の設計を依頼されたのがレスカスであったと当時の新聞記事の中にみられる。しかし、フランス領事館は幕末以降横浜では居留内を転々とし、ドイツ病院が建つ頃にはすでに居留地74番にあ

り、1886年までこの地番にあったので、横浜フランス領事館の設計にレスカスが携わったとは考え難い。ただし、フランス領事館がフランス公使館の誤記であったとすれば、その信憑性はかなりでてくる。

フランス公使館は、それまであった三田の済海寺より永田町2丁目の新しい公使館に移転したのが1881年のことであったから、この公使館とレスカスは少なくとも時期的には一致する。また、新しいフランス領事館は、それまであった旧海兵隊の兵舎の跡地に建てられる予定と記事にされているので、永田町2丁目になんらかの兵舎が建っていたことが証明されると、この領事館は公使館だったということになる。

レスカスが横浜居留地84番にいた1878年当時、彼が陸軍中将・大山巖に宛てた領収書が残されている。¹³⁾ この領収書は1878年（明治11）4月の日付を持ち、大山邸の玄関、ホール、階段等に使用したモザイク・タイルの代金98ドル強のものだが、おそらくこれらのタイルは大山邸の旧居、つまり霞ヶ関1丁目2番の自宅に用いられたものだったであろう。こういった取り引きがあったことで、後日レスカスは大山邸の新居の建築と関わるようになるのだが、この面はもう少し先のところで触れることにする。

現在、明治村に瀟洒で気品あふれる二階建ての西洋館・西郷従道邸がある。西郷邸は、かつて東京の上目黒にあった別館で、戦後は東急や国鉄の所有するところであったが、住宅建設のため解体される運命にあったものを、昭和40年5月に明治村に移築し復元され、同時に国の重要文化財として指定されたものである。この西郷旧邸別館の設計・建築に携わった者がレスカスであり、その完成は1877年頃であろうと推定されている。

西郷従道邸をレスカスの設計だと断定するには調査がいまだ進んでいないが、日本に多い地震の被害を考慮に入れて、屋根の重みを軽く押さえている工夫、室内の建具の金物類がフランス製であることなどから判断して、まずレスカスの設計といってもよさそうである（因に、レスカスには「地震の面からみた日本の建築構造と建築構造一般についての研究」とい

う論文がある)。明治天皇も行幸し、西郷邸の庭先で催された大相撲をご覧になったこの別邸の建築日が、もう少し限定されると調べも大幅に進展するものと予測されるが、今のところ百パーセント彼の設計と自信を持って断言するところまでいっていない。

1878年（明治11）秋、レスカスは三菱郵船会社に雇用された。1877年までの三菱会社への外国人の入・退社の人名は、詳しく『三菱社史』に記録されているのに、どのようなわけか1878年以降の外国人のそれは記載されていないので、正確な雇用日は不明だが、1878年秋より1883年春までレスカスは三菱会社に雇われ、永田町1丁目や深川小松町7番地に居住したものと考えられる。

1879年3月、レスカスは永田町1丁目18番地に建てられる大山巖の新居の設計・建築に取りかかったが、約828坪の地所に70坪余の本館が建てられ、建築費用が地代を遥かに越す8千円もかかった洋風二階建ての邸宅であった。この新居に関する名籍書が残されており、参謀本部の名の入った用箋に、大山巖が自ら書いた下書きを下記に記録しておく。

「永田町家屋の名籍書（明治12年3月欠日）今慈ニ陸軍中将勲二等正五位大山巖ハ帝国紀元二千五百三十九年即チ明治十二年三月 日東京永田町壱丁目十八番地私有地ニ於テ自家永住不易ノ厦屋ヲ建築ス且ツ其基礎ノ下東北隅ノ部分ノ如キハ鑿ツ事地面ヨリ深サ十四尺ニ至リ其土ノ茶色ナルヲ見ル盖シ永久堅固ナルヲ要スルカ為メナリ仍テ其事由ヲ記シ左ノ名籍ヲ収メ以テ不朽ニ垂ルコトヲ證ス

陸軍中将勲二等正五位 大山巖¹⁴⁾」

これとは別に、やや厚手の和紙に書かれたもう一通の名籍書がある。この方は、先の下書きより数カ月遅れて書かれたもので、上記の文とほぼ同じだが、少し異なった個所がある。

「……明治十二年三月ヨリ徑基ヲ始メ東京永田町……其土ノ茶色
（地山）ナルヲ見ル……（傍点筆者）」

大山 巖

妻 澤

長女 信

次女 満

保証親族

陸軍中将兼参議陸軍卿勲一等従四位

西郷従道

長男 西郷従理

議官兼待補工部少輔従四位

吉井友実

長男 吉井幸蔵

建築者

仏蘭西人

レスカース¹⁵⁾」

この大山邸の正面・断面図などの、100分の1の見取図が保管されているが、変色がはげしく一部見えにくいところもある。専門家の手でトレースしなおすことをかつて提唱しておいたが、このまま放置しておけばただの紙切れになってしまわないかと懸念している。

大山巖は佐和夫人と一緒にここで暮らしたが、明治15年8月に夫人は逝去した。このため巖は翌16年11月に、鹿鳴館の華となる山川捨松と結婚し、17年2月から1年3カ月に渡って夫妻はヨーロッパ諸国を歴訪した。なお、この大山邸は後に宮内省雇いのドイツ人、次でフランス公使館、朝鮮公使館に貸されていたが明治29年にある日本人に譲渡された。

大山邸を完成させたレスカースは、1880年4月より江戸橋側の駅通寮の地

所に、三菱倉庫の建築に着手した。この地所は、岩崎弥太郎が荷運搬のための荷扱所を建てる目的で、明治9年12月に駅通頭・前島密より借用を認められたところで、レスカスの設計・監督のもとに1880年12月に倉庫は完成した。¹⁶⁾

約1,500坪を有する三菱倉庫は七棟あったことから「七ツ倉」と呼ばれ、煉瓦造りの広大な倉庫であったため東京名所のひとつに数えられた。この倉庫の写真は残されており、また井上安治の画いた『東京真画名所図解』の「四日市」,「日本橋」や「日本橋夜景」の絵でもみることができる。

三菱倉庫の建設中は現場で起居し監督したレスカスは、倉庫の完成後の1880年12月に深川小松町7番地に移り住んだ。ここは三菱会社がレスカスのために1880年9月に購入していた一部二階建ての瓦葺平屋,「松本源兵衛, 深川小松町ニ有スルトコロノ家屋土蔵竝ニ家附物」¹⁷⁾で、その建坪は60坪ほどであった。

三菱会社建築課に籍をおくレスカスは1881年(明治14)中も小松町に住んだので、あるいは深川付近のなんらかの建設に関わりを持ったのかも知れない。この頃に彼が設計したものに、永田町1丁目14番地のドイツ公使館があったともいわれるが、この裏付け調査はできていない。

1882年(明治15)1月、皇居の新築が着手されることになり、先に木石の廻送が急がされ、地質の検査が実施された。この地質検査には三人の外国人専門家が選ばれ、その中にレスカスもいた。下記の新聞記事に「ニスカース」と書かれているのが、もちろんレスカスのことである。

「皇城御造営に付建築地々質実測の委員に御依頼になりし内務省御雇蘭人ムルドル氏横浜在留英国人(有名な地質家)タイヤック氏三菱会社雇人仏人ニスカース氏の三氏は先頃僅か四日間にして実査全く了り夫々復命されしかば我政府よりは右の答礼として此程該建築御用掛たる榎本中將の名義を以て一名に付金八百五十円づつの慰労金を贈られたりとい

¹⁸⁾
ふ」

皇居の実地調査はわずか4日で終わったが、これに対し850円もの慰労金が与えられたということは、レスカスの地質家としての非凡な技倆を評価してのことだったわけである。

1882年1月の皇居の調査を終えたあと、3月から10月にかけて再三に渡たり神戸と上海を往復しているの、おそらくこの時期に彼地での建築に携わったものとみなされる。三菱会社の雇用は、資料によって1885年（明治18）までとするものもあるが、レスカスは1883年3月10日に横浜よりイギリス船「アラビック」号に乗船し、サン・フランシスコを経由しパリへ帰っていった。

フランスでのレスカスの足取りは充分に手がけていないが、建築学会誌に掲載された「地震の面からみた日本の建築構造と建築構造一般」¹⁹⁾なる論文と、1887年に刊行された32頁よりなる『幼児手帳』（Le Carnet de bebe）という冊子がある。幼児の成長と健康状態の図表を付けたこの冊子が、建築家のレスカスとどこでどうぶつかるものか、その接点を求めているところである。

1890年にレスカスは再び日本の土を踏んだが、この再来日が自ら望んで来たものか、それとも建築・設計の依頼を受けての来日だったかは明確でない。1883年フランスに帰国した後で、彼は結婚し子供をもうけていたが、1890年12月27日の再来日の折には、妻と子供ふたりを連れての到着であった。

1891年（明治24）に入り、レスカスは横浜居留地273番Cの吉浜橋側に居留し、1893年までの2年間ここに住んだ。この間、彼が手がけた建築としては、居留地209番で生糸業を商っていたバビール商会の倉庫があった。²⁰⁾

このバビール商会の新倉庫は、居留地226番に建築費11,486円をもって建てられた建坪131坪の三階建て煉化石造のもので、壁を白漆喰塗りとし

た大きなものであった。起工は1893年3月26日で、落成はこの年の8月21日であったが、レスカスはこの倉庫の設計を依頼され、監督の方はダイヤックが担当したのであった。しかし、レスカスはこの倉庫の完成をみることなく、1893年3月31日に妻と日本で生まれた幼児を含め3人の子供と一緒に、バンクーバー経由でフランスに去ってしまったのだった。

再来日の折に、レスカスが設計したものとしては、この倉庫しか知られていないが、この間に横浜の洋館建築に大きな力を発揮した京都生まれの村田梅吉を指導したという。

「(村田梅吉)君が建築上に於ける特技は洋館築造にあり、横浜市内要樞の街衢その美観を添ゆる洋風建築中君の手腕により出でしもの多し、J. L.の標記は先師レスカー氏より譲興されたる者又以て誇とするに足る²¹⁾」

村田梅吉の建造物には、レスカスの頭文字を配したマークが入れられていたらしいが、横浜は大震災によって完全に壊滅してしまったために、このような文字を組み合わせた村田梅吉の建物は、残念なことだが全く知られていない。

日本におけるレスカスの動向を記述したにとどまったが、専門家による大山巖邸と西郷従道邸との比較・検討から新しい進展を期待したい。また、レスカスの出生や死去を含め、彼のフランスでの活動を追うといった面での調査も残されている。日本の近代建築の上でも、ほとんど語られることのなかったレスカスだが、その足跡は大きいだけに、大勢の人たちの手での資料の発掘を望んでいる。

なお、ロシアの伝道師として来日したニコライは最初は箱館に住み、後に東京に住んだが、ニコライ堂が建設される前にニコライが住んだ教館が、レスカスの設計ではなかったかと判断される。明治7年12月10日付の

『新聞雑誌』の記事中、この教館の「匠工ノ長ハ仏国ヨリ雇イ入レタル由」と書かれている。

なお、お茶の水にいま立つニコライ堂は、初代のニコライ堂が関東大震災で焼けたため、昭和4年（1929）になって再建されたものである。

ボアンビル（C. A. C. de Boinville）

ボアンビル（Charles Alfred Chastel de Boinville）は、1872年12月16日に工部省測量司（後に工部省営繕局〔寮〕）に雇用されることになりフランス郵船で来日した。この日を太陰歴になおすと明治5年11月16日となり、この日より3年の契約で工部省に雇われ、月給は初年度200円、2年目250円、3年目には300円と増給された。

1875年12月15日をもって満期となるはずであったが、同年12月12〔13〕日に再契約がなされ、さらに3年間の雇用が認められた。その後も雇い継がれ、1880年7月より360円50銭となり、この間の皇居の建築中には他に100円、紙幣寮の建設中には125円の給与が支払われるという厚遇を得ていた。ボアンビルの雇い止めははっきりしないが、後述する帰国日などから考え、1880年（明治13）12月末日のことだったと思われる。

ボアンビルは来日した翌日の17日に上京し、地理寮構内や大和屋敷11番に住んだが、後者の場所で長男が誕生している。

ボアンビルはC. ド. ボアンビル神父の長男で、来日した時には独身であったが、1874年（明治7）5月3日に銀行家・W. ク라운の末娘・アグネス（Agnes）と横浜のフランス領事館で、次でイギリス公使館でパークス公使立ち合いのもとで結婚式が挙行された。1878年5月16日に長男が生まれ、翌1879年には長女も誕生している。

ボアンビル夫人や娘・マリー（Marie）については、勝海舟の三男・梅太郎と結婚することになる、永田町に住んだクララ・ホイットニーの日記で、その人と柄をある程度知ることができるので、関心のある方は『クラ

ラの明治日記』に目を通すよう勧めておきたい。

ボアンビルが設計したもので最も有名な建物は工部大学校本館だが、これはコンドルの設計したニコライ堂、カッペレッティの遊就館（靖国神社の陳列所）と共に、明治中期の三代名建築と贅えられたものであった。工部大学校は1875年（明治8）4月1日に起工され、1877年6月20日に竣工をみた二階建て、中央に塔を持つ華麗かつ清楚な建物で、約700坪を有する拡大なものであった。なお、同じ頃に起工をみた工部大学校の生徒館の増築もボアンビルの手になった。

1875年5月18日に起工し、1876年10月10日に完成をみた紙幣寮印刷局は、初めウォートルスが設計し、ボアンビルが後を受け継いで完成させたものであったが、天空に聳える鷲を配した建物は珍しく、東京新名所のひとつでもあった。

1878年11月1日に起工され、1881年5月30日に竣工した外務省本廳舎は、工部省営繕局において設計・担当のもとに完成をみたものであった。当時の営繕局にはコンドル、ダイアックさらにカッペレッティがいたが、その様式からボアンビルの設計とみなしてよさそうである。

これらの他に、千住羅紗製造所も1879年頃にボアンビルの手で設計されたといわれているが、銅版画や写真でいまだ確認できずにいる。官廳関係の多くの建造物には、設計者不詳のものがたくさんあるだけに、今後の丹念な調査によっては、ボアンビルらの名もさらに登場する可能性は大いにあり得る。

1880年（明治13）暮にボアンビル一家は日本を去ることに決め、この12月18日に彼らの住んだ大和屋敷、つまり東京・溜池葵町3番地の自宅で、家財道具類の処分をした。この公開入札による処分はブルヌ商会の手で行なわれ、数多くの家具や食器、絵画、稀観本、絨毯、さらによく調教された三匹の猟犬などがオークションにかけられた。この大和屋敷は、彼らが永年住んだところだったので、おそらくこの年まで営繕局雇いの身分の

ままだったはずである。

1881年1月21日に横浜を出港した英船「プライアム」号（Priam 1572トン）の乗船客にボアンビル夫人と一人の子供がいた。妻子はまずイギリスへ向っているので、夫人かボアンビルの両親がイギリスに住んでいたものと考えられる。ボアンビルの父親がキングストンに住んでいたこともあったので、その関係もあったのかも知れない。

ところで、先の船にはボアンビル自身ともうひとりの子供の名前がない。ボアンビルは別の郵船で一足早く日本を発ったのか、それとも夫人と同じ船だったのか、このへんの調査も残されているが、家財の処分後の帰国だけでなく、家族全員並っての出国と常識的には考えたい。

サルダー（Paul Pierre Sarda）

サルダーの出生地については、彼が1905年（明治38）に逝去したときの欧字新聞の記事ではソワール県マット（Mathes）と書かれているが、実際にはロワール県マルル（Marlhes）が正しく、1844年7月12日の誕生であった。²²⁾

サルダーは中央工業学校（Ecole Centrale des Arts et Manufactures）を卒業して間もなく、1873年に横須賀造船所（横須賀製鉄所を明治4年に改称）の機械学教師として採用され、1873年（明治6）10月16日に来日した。彼は翌17日に横須賀に出頭し、この1873年10月17日より3カ年の契約で雇用され、月給は200ドル（円）、1875年より325ドルに増給した。横須賀では、ここにあった学校「黌舎」で日本人を教授していたが、1876年（明治9）11月8日契約期限が満ちて横須賀を去り、一時期築地居留地33番でレストランやパン屋を経営していたクラトー（J. Clataud、五稜郭の戦いで榎本武揚軍に参じたフランス兵のひとり）の家に寄寓したり、また横浜居留地84番のレスカスの建築事務所で数カ月働いたりしていた。

横須賀造船所を満期雇止めとなったあと、サルダーと造船所との間で給

与支払いに関してごたごたが生じ、サルダーは在横浜フランス領事に告訴状を提出するまでに進展する一幕もあった。この時の彼の要求書を読むと、こと金銭に関してはかなり細かったことがわかるが、本稿とは直接的な関わりのないものだけに割愛する。

1877年（明治10）6月12日より同年12月25日の約半年間、どのような伝があったものか、月給325円もの高給で東京大学の理学・数学の教師として採用された。この頃の東京大学の物理、理学、数学の教師にはベルソンやディブスキーらがおおり、彼らの給料が350円であったから、サルダーもかなりの優遇を受けていたわけである。東京大学での在職中、サルダーは東京の南留原町3丁目10番地、次で駿河台鈴木町・本田高問屋敷に居住していた。

東京大学に在職中、契約の切れる1878年1月より6年間、月給400円の抗業教師としての働き口がみつかった。彼は「島根県出雲国第三区嶋根郡内中原町土族・森牧右衛門（外一名）²³⁾」と契約し、「石見国邇摩郡銀山町一四三番地一 河野綱太郎²⁴⁾」方に居留し、そこで働くことになった。しかし、出雲国や石見国に赴くことはなかった様子である。

外務省記録に上記のように書き留められているだけに、決していいかげんな契約でなかったはずだが、この頃サルダーが横浜や東京に住んだことを裏付ける資料はいくつもあるだけに、抗業教師として働く話は完全に反古となったものと判断される。

1877年12月に東京大学を解雇されたあとサルダーはしばらく東京に留まり、1878年夏に横浜居留地51番で、翌1879年にはやはり横浜居留地92番に移転し、ここで建築事務所を開いた。1877年秋口に横浜で刊行されていた欧字新聞で、日本鉱山に関しての鋭い批判がなされたことがあったが、おそらくこういった批判とサルダーの契約が実施されなかったのは無縁ではなかったろう。

また、1877年7月22日に東京府華族・島津忠義に招かれた山カ野金山で

働くため来日したフランス人鉱山技師ポール・オジェ（Paul Ozier）は、サルダーとも付き合いがあったが、オジェは1879年6月にサルダーが横浜にいたことも証言している。オジェは生野の鉱山師長だったコワニエの紹介で来日し、彼とはサン・テチエンヌの鉱山学校以来25年にも渡たる親友だったが、サルダーが帰国したコワニエを侮辱したらしいことから、この三者の間ではかなり烈しい罵詈や誹謗が、さらに手紙による非難と侮辱が繰り返された。このようなごたごたした背景も無視できないが、この件がサルダーの契約解消とぶつかるかは結論づけるまで至っていない。

1880年秋、サルダーは三菱会社と2年の契約を結び、ここの建築課で働くことになった。サルダーの三菱会社雇いの記録は、『三菱社史』などの中にみあたらないが、1880年（明治13）10月の新聞記事の中に、「日本橋材木町一丁目三菱会社事務所レスカー氏代理サルダ氏ハ紙幣取交千二百八十円を盗取られし由その筋へ訴へ出たるハ去二日の事なり²⁵⁾」とある。さらに、これを受けて横浜で発行されていたフランス語の新聞にも、「三菱会社雇用のサルダー氏の家より1,280円が盗まれた²⁶⁾」と掲載されている。今ならさしずめ5百万円に近い金額だったろう。

手元に三菱会社の郵船名や、それらの船舶が寄港する先の地名を集めた印譜帳「明治十四年 印譜 三菱²⁷⁾」がある。この印譜帳の中にレスカスとサルダーの名の入った印影があり、サルダーのそれは「郵便汽船三菱会社建築課 サルダ」と朱肉にて押捺されている。これらの資料からだけでも、サルダーが三菱郵船会社に雇われていたのは疑う余地がない。

三菱会社に雇用されていた間、サルダーが建築課でどのような仕事に携わったのか不明だが、1882年1月には約1カ月に渡って上海に出かけており、またこの7月には横浜の欧字新聞に「横浜の給水」（The Water-Supply of Yokohama）というかなり長文の論文を寄稿している²⁸⁾。

1882年（明治15）夏頃に横浜に戻ったサルダーは、今度は山手46番に住み1897年（明治30）までの長い間ここで暮らした。この間、彼が設計・監

督した建造物は割に多く、以下年代順に紹介しておきたい。

1881年（明治14）6月、横浜居留地の有志たちの間で、新しい劇場を建設しようという声が起こり、ハー・アーレンス（Hinrich Ahrens）らを中心に10名からなる準備委員会が結成され、有限責任会社・パブリック・ホール・アソシエーションが1882年12月に正式に発足した。

このアソシエーションは、谷戸坂を登ってすぐの角地、山手256・257番の総坪数813坪の敷地に、まず劇場を建てることが最初の目的であった。この劇場の設計はカッペレッティに依頼されたが、彼の提出した設計書は費用の点であまりにもかけ離れ過ぎていたため、やむも得ずこの契約を取り止め、他の設計者を捜がすことになった。この折に、設計を依頼されたのがサルダーであった。

サルダーの設計・監督のもとに「パブリック・ホール」（「ゲート座」）の建築工事が1883年春に開始されたものの、この年の12月には資金不足のため一時工事が中断されるという事態に落ち込んだ。資金調達が順調に運ばず、その打開策として、最初サルダーが設計した二階部分の演奏会ホールを取り止め、建物の高さを低く押さえるという案に最終的に落ち着き、1884年9月に工事は再開されることになった。このへんの事情は当時の欧字新聞に詳しく²⁹⁾、またワグマンの画く『ジャパン・パンチ』³⁰⁾でも知ることができる。

さまざまな問題を残しながら、やっと完成した「パブリック・ホール」は建坪270坪で、地下一階地上二階建ての石造・煉瓦造りのもので、その総工費は23,400ドルに昇り、その完成日は1885年4月のことであった。これに使用した煉瓦等は、やはりフランス人のジェラル（Alfred Gérard）の造った製品だったり、興味ある話題もあるが、これらの面については別の機会に触れたいと考える。

内装・外装ともに未だ未完成の「パブリック・ホール」ではあったが、1885年4月18日に横浜アマチュア管弦楽団によって、「パブリック・ホー

ル」の開場記念演奏会が満員の聴衆を前に開かれた。演奏会の終わったあと、この新劇場を建てたサルダーが舞台に呼ばれ、盛んな拍手を受けたのであった。³¹⁾

1885年（明治18）に完成した建物に、全体が二階建てで、その中央に望楼を持つ煉瓦造りの横浜税関がある。この旧横浜税関は一時県庁として使用されたこともあったが、サルダーがその設計について助言したと伝えられている。

1873年（明治6）8月16日、横浜居留地20番に「グランド・ホテル」が新規開店されたが、この隣接地の18・19番に「インターナショナル・ホテル」（後の「ウィンザー・ハウス」）があった。この「ウィンザー・ハウス」は、後に「グランド・ホテル」に合併吸収されるようになるが、この建物を取り壊し「グランド・ホテル」新館を増築しようとの声が持ち上がった。1889年（明治22）のことであった。

新館の建設にあたり、サルダー、ピヨン、ダイアックらに見積もりの提出を求めたところ、サルダーのそれが最も安く、結局グランド・ホテル側はサルダーに設計・企画を依頼することに決定した。

企画の過程で、従来の旧館の右横に新館を建てるばかりでなく、旧館裏側の敷地内にも増築してはとの意見もだされ、最初のサルダーの設計や見積もりに手直しが生じた。このため、ホテル側が春の旅行シーズンを見込んで開業する目論はずれ、1890年6月下旬の新館オープンとなった。この新館は二階建て煉瓦造りの大きな建物で、この時点でホテルが保有する部屋数は360室となり、日本最大のホテルとなった。

ホテルの手直しと開業の遅れによって、グランド・ホテル側が設計者のサルダーに設計・監督費等を支払わない事態が生じ、後日サルダーが訴えで、両者の間で領事館裁判で争われることになった。この裁判記録を読むと、横須賀造船所を辞めた後の金銭問題の時もそうであったが、なかなかサルダーはこと金銭になると一步も退かず厳しい面があった。

「グランド・ホテル」は大正12年の大震災によって壊滅するまで存続したので、写真や絵葉書でホテル外観を十分に偲ぶことができる。なお、旧館の設計はダイアックではないかと推測されるが、これを裏付ける記録は知られていない。

サルダーが横浜居留地で手懸けたホテルとしては、他に1893年に開業される40番の「ライツ・ホテル」(Wright's Hotel)と、1898年(明治31)に26番にオープンされる「ホテル・ド・ジュネーブ」(Hotel de Genève)とがある。両ホテルとも屋根裏部屋まで含めると四階建てで、木骨石造りの工法など実によく似た外観となっている。「ライツ・ホテル」は1916年(大正5)まで、「ホテル・ド・ジュネーブ」は1911年(明治44)まで続いたが、「グランド・ホテル」や「クラブ・ホテル」と共に横浜を代表するホテルだったので、それだけサルダーの設計がしっかりしたものであったといえることになる。

サルダーの手懸けたホテルで現在判明しているものは以上の三つのホテルだが、他に教会の設計もなした。この教会は1888年(明治21)に建設の話しが持ちあがり、1892年(明治25)1月に献堂式をみた中区尾上町の指路教会で、ゴシック式というべき威風堂々とした石造りのものであった。時期的にみて、「グランド・ホテル」の次に設計した建物ということになる。この広大な教会も大地震には勝てず、大正12年9月1日に崩壊し、今は写真でしかみることはできない。

サルダーの設計した公共的な建物としては、他に谷戸橋近くに建ったフランス領事館(現在のフランス山公園)がある。山手185番のおよそ1,480坪の敷地内に建ったこの領事館は、サルダーの監督のもとに1894年(明治27)に建築が開始され、2年余りの年月をかけ1896年3月に完成をみたものであった。

技術と贅沢の粋をこらした威厳あるフランス領事館は、厚いコンクリートの基礎の上に、箱根から切りだした大きな石と部厚い煉瓦で外壁は仕上

げられていったが、建物全体に用いられた煉瓦は東京・深川煉瓦工場で生産されたものが使用された。床、階段や手すりにはオレゴン杉、^{けやき}檫、檜がふんだんに使われ、内部に使用された金具類の大半はフランスから取り寄せたものであった。豪華な三階建て領事館の屋根は、マンサール（Mansart）が生みだした二重勾配屋根・マンサード屋根が取り入れられ、仙台スレートで葺かれたのも大きな特徴であった。

美しい景観を誇ったフランス領事館は、大震災で壊滅し今はない。1923年9月1日土曜日午前11時58分、相模湾海底に震源をもつ大地震が起こり、サルダーの設計した建物をことごとく奪い去った。横浜は震度六の烈震だった。

サルダーが設計・建築した公共的建物は上記のものが判明しているが、今後の地道な調査によってはまだまだ登場する余地はある。例えば、サルダーが「山手は俺のもの」（Le Bluff c'est moi）と豪語する図がビゴアの諷刺画の中にあり、³²⁾山手地区は金になると暗に語っているだけに、この区域の個人住宅には多くサルダーが関わった家屋があったのは間違いない。

1882年（明治15）以降、長い間に渡って山手46番に居住したサルダーは、1897年（明治30）に山手より本町通りの84番（居留地制度のなくなった1899年以降は山下町84番地）へ移転し、ここに建築事務所を開いた。

山下町84番時代のサルダーの建造物は全く知られていない。また、彼は弟子を養成しなかったものか、サルダーに師事したという日本人建築家の証言もない。さらに、生涯独身を通したため後継ぎがなく、このためサルダーの調査はこれまで全く手懸けられることもなく、今日に至っている。拙稿が呼び水となって、サルダーに対する正しい評価が与えられ、建築界における彼の存在が決して小さなものではなかったとの認識が深まることを期待したい。

巨大な体軀を誇って活躍したサルダーも病に倒れ、1905年（明治38）4月2日に永眠した。サルダー60歳であった。

「山下町八十四番館主ペーサルダ氏病氣之處藥石其効ヲ奏セズ本日午前七時四十五分永眠被致候ニ付明三日午後一時三十分自館出棺葬儀執行仕候間此段同氏生前辱知諸君ニ謹告候也

明治三八年四月二日

横浜市山下町八十四番館

ペーサルダ執事³³⁾」

サルダの遺体は横浜外人墓地に埋葬されたが、その墓は土砂崩れに遇い、長いこと土砂に埋もれ確認することができなかった。それが今年(1985)に入って、墓地の修復がなされた過程でひょっこり土の中から顔をだした。美しい大理石には、下記のように刻み込まれた一文がある。現在でも一部判読しにくい個所もあり、さらに風化することも予測されるので原文のまま記録しておきたい。

「 A
 la mémoire
 de
Paul-Pierre Sarda
Ingénieur-architecte
Ecole Centrale de Paris
né à Marlhès (Loire)
le 12 juillet 1844
décédé à Yokohama
le 2 avril 1905

————— ○ —————
Hommage de respect
et de reconnaissance³⁴⁾」

ルイ・フェリックス・フローラン (Louis Felix Florent)

ルイ・フェリックス・フローランは1866年9月1日（慶応2年7月23日）より1870年9月1日（明治3年8月6日）までの4年間、横須賀製鉄所に月給400ドルで雇用され、1866年11月13日に来日した燈台建築の専門家であった。彼はその後も雇い継ぎが認められ1871年9月2日まで横須賀製鉄所に留まり、同年11月1日（明治4年9月19日）より工部省製作寮に転出し、1874年（明治7）4月14日までここで働き、翌15日のフランス郵船「ヴォルガ」号に乗船し帰国した。

ルイ・フェリックス・フローランが日本滞在中の約8年間に手懸けた仕事は、工場建設や造船関係でかなりのものがあるが、その業績はなんといっても彼が日本の洋式燈台に尽した技倆をもって第一とする。フローランは首長・ヴェルニーの陰にかくれ、燈台建設の記録などにもほとんど名がでてこないが、日本最初の洋式・煉瓦造り燈台であった観音崎燈台を初め、いくつもの燈台の設計・建築に携ったことは下記の記録に詳しい。

「仏蘭西国土木技師ルイ・フェリックス・フロラン儀ハ……観音崎野島崎東京湾城ヶ島各燈台、建築……ニ従事シ……同人ヲ勲四等ニ叙セラレ旭日章ヲ下賜リ候様仕度此段謹テ上奉ス」³⁵⁾

この記録は明治26年10月20日付のフローラン叙勲に関する議案だが、かなり長文に渡たるので、必要個所のみを抄録した。これによると、フローランは四つの燈台の建設を成し遂げたが、それらの燈台がどのような規模を持つものだったのかなどに触れておきたい。

観音崎燈台

観音崎は神奈川県三浦半島の東端（現、横須賀市鴨居）に位置し、房総

半島の富津岬と相対する浦賀水道の一角にある。観音崎には江戸時代に江戸湾を防備する目的で台場（砲台）が造られていたが、この観音崎台場はあまりにも高過ぎる位置にあったために大砲の発射には不都合であった。この台場が他に移された後、この跡地に観音崎燈台が建設されることになった。

幕府は慶応2年（1866）にイギリス、フランス、アメリカ、オランダと四カ国条約を結んだが、その条文の中に船舶の出入り安全のため開港した各港の最寄りに燈明台、浮木、瀬印木を備えることとの一条が含まれていた。これを受け、幅わずかに5.6キロメートルしかなく、しかも最も航行の烈しい浦賀水道の出入口の観音崎に燈台が建てられることになったのである。

これより先の慶応元年（1865）、幕府はフランスに燈台器械の発注をしており、横須賀製鉄所の建設などの関連もあって、幕府崩壊後の明治元年、明治新政府は観音崎、野島崎、東京（品川）、城ヶ島の四燈台の建設をフランス側にあたせたが、この設計・建設に最も加担したのがフローランであった。

観音崎燈台は1868年11月1日（実際には10月下旬の可能性もある、旧暦の明治元年9月17日）に起工され、同年12月29日に完工したが、その点燈は1869年2月11日のことであった。観音崎燈台の構内に現在も点燈記念碑があるが、この碑には日本語で「点燈明治戊辰正月元旦」、フランス語で「1869年2月11日点燈」と刻まれている。完工から点燈まで1カ月半もかかっているのは不思議な感じがしないでもなく、1868年12月29日の完工日が、実は明治の誤りであれば、明治元年12月29日の完工、翌2年1月1日の点燈と都合がよい。

観音崎燈台には、横須賀製鉄所で製造した「ヨコスカ製鉄所」と四角な銘の入った煉瓦6万4千6百枚が使用され、その建築工費は7,683円に昇った。なお、この工費には別の金額を示す資料もあるが、記述に混乱が

生じることを避け、後述するひとつの資料を参考にした。

観音崎燈台はわが国初の洋式燈台で、しかも円筒型の燈台とは異なり、四角型の上に望楼を持つ一風変わった煉瓦造りのものであった。煉瓦造りの建造物は鉄筋などとは違って地震に弱く、この観音崎燈台も1922年（大正11）4月26日の地震で崩壊した。なお、現在の観音崎燈台は関東大震災後に建てられた三代目に当たるものである。

話しは横道にそれるが、現在11月1日をもって燈台記念日として制定されている。これは観音崎燈台が1868年11月1日に起工されたことをもって定められ、同燈台が起工後80年目に当たる1949年（昭和24）11月1日を第1回目の燈台記念日としたものである。

野島崎燈台

1866年6月25日（慶応2年5月13日）の江戸条約が、わが国の洋式燈台の設置の発端となったのだが、この折に観音崎の他に、野島崎、剣崎、神子元島、檜野崎、潮岬、佐多岬と伊王島の八カ所に燈台を設置し、横浜・本牧と箱館の二カ所に燈船を浮かべることとなっていた。

観音崎に続いてフローランらが建設に着手したのは野島崎（安房国）燈台で、1869年3月に工事に取りかかったものの場所の関係から以外に手間どり、その完成は1870年12月（記録によっては1870年1月）のことであった。資材の運搬と燈明器械の購入費がかなり高額だったこともあって、工事費は21,207円と観音崎燈台の3倍近い金額を投入することになった。また、完成から1873年末までの3年間の維持費が1,703円もかかっているが、観音崎が5年間で665円の維持費であったのと比較すると、かなり金のかかった燈台であったことがよくわかる。

わが国最初の第一等燈台であったが、どの程度の横須賀製鉄所製の煉瓦が使用されたかなど調査はできていない。ただし、フローラン家に伝わる写真の中に、この燈台と思われる工事中と完成後の円型燈台の数葉の写真

が残されている。

城ヶ島燈台

城ヶ島は三浦半島の最南端にある周囲0.7キロメートルの小島だが、この付近には暗礁が多く古くから船の遭難が絶えず、1648年（慶安元年）には烽火が設けられ、1678年（延宝6年）には燈明台が築かれたとの記録もあるだけにこの燈台の歴史は古い。

フローランらが手懸けた城ヶ島燈台は1870年7月に着工し、1870年9月8日に完成、点燈をみたが、観音崎燈台、紀伊国（和歌山県）の檜野崎燈台に次いで三番目に古い洋式燈台であった。円型高さ65メートルの燈台は、横須賀製鉄所製の煉瓦8,000枚をもって築かれ、フランスから取り寄せた五等不動レンズが備え付けられた。光源は落花性油を使った単心燈であったが、それでも光達距離は9海里（現在の城ヶ島燈台は15.5海里）にも達していた。

建築費はほぼ同じ頃に完成した野島崎燈台の10分の1にも満たない2,071円という非常に低い金額だったが、それだけ横須賀製鉄所の煉瓦の単価が安かったことになる。因に、わが国最初の本造燈台は1871年10月5日に完成した石廊崎燈台だが、この建築費が1,237円であったからそれほど大きな差はない。城ヶ島燈台も関東大震災で崩壊したため当時の燈台は写真で偲ぶしかない。なお、現在の燈台は震災後の鉄筋コンクリート造りで、二代目に当たる。

品川燈台

先に示した「敍勲」で東京湾燈台とあるが、「太政類典」では品川沖二番台場と記録されている³⁶⁾。この品川沖二番台場に建設されたのが、東京湾燈台とか品川燈台と呼称されたと考えられる。

品川燈台は1873年（明治6）2月に工事が着手され、同年4月に完成を

みた燈台だが、その建築費は1,898円であった。フローランらフランス人技師たちが携わった燈台としては少し時期が遅すぎる感じがし、品川沖二番台場の燈台と品川燈台が同じものだったのか確認できるまで、この燈台に関しては宿題としておくことにする。(東京湾燈台の点燈は1870年4月4日との記録もある)。

1868年(明治元)に、新政府が横須賀製鉄所のお雇いフランス人に命じて建設にあたらせた本邦初の洋式燈台は上記の四基にとどまり、以降イギリス人のブラントンが専ら燈台の建築にあたった。ブラントンは1868年に来日し、帰国する1876年までの約8年間に燈台26基、燈船二基(本牧燈船と箱館燈船)を完成させた、わが国の洋式燈台の生みの親であった。

本邦の洋式燈台の創設期は、まずフランス人の、次でイギリス人の技術者の手で指導・建設がなされていき、この時期の工部省燈台寮が占める割合は、工部省予算の30パーセントにも達していただけに、いかに燈台新設が急務だったかがよくわかる。

燈台の歴史、工費、工事着工日や完成日などについては、「燈台局年報」や「工部統計志」、あるいは海上保安庁燈台部の記録などからある程度まで搜がしだすことができるが、細部に至ると食い違いが実に多い。本稿では、専ら燈台局が作成した1868年8月より1873年末までの総経費を細かに記録した資料を参照した。³⁷⁾これとて、工事費欄にドルと円による費用が併記されているので、このドルによる表記がなにを意味するのか検討の余地がある。

フローランは、1830年4月1日フランスのフィニステール県のカンペール(Quimper)市で生まれ、1900年8月24日に70歳で同地で永眠した。日本滞在中は妻、息子・ルイ、娘マリー・アメリーと一緒に暮らしたが、1874年4月の帰国は気管を悪くしたためであった。

フローランの日本での業績は燈台建設の他にも、横須賀製鉄所内の数多

くの工場建設，ドックの建設，逸見の隧道建設があり，製作寮時代には長崎のドックや兵庫の船舶修理所建設などにも大きく関与した。

なお，1872年2月1日に横須賀造船所の建築課長として雇用され来日したヴァンサン・クレマン・フローランは，ルイ・フェリックスの実の弟である。

官雇いの外国人の場合であれば，契約書などある程度の記録は残されており，さらに叙勲の対象にでもなっていれば，その業績等が記載された文書が添付されたのが常であったから，その調査は比較的容易に進展することが多い。しかし，横浜や長崎に住んだ巷の外国人の足跡を追いかけてしまうと，資料の発掘はよほどの幸運にでも巡り合わない限りとうてい不可能で，その追跡は常に多くの困難を伴う。定稿にはほど遠い文章だが，現時点でここまで調べられたという意味で発表することにした。「研究ノート」的な読み方をしていただきたいと思う。

- 注 1) The Japan Herald (1865.1.21号)。
2) The Daily Japan Herald (1866.11.7号)。
3) 拙稿「富岡製糸場のお雇いフランス人」(『千葉敬愛経済大学研究論集』20号)。
4) 「富岡製糸場記 全」。
5) 『横須賀海軍船廠史』(自元治元年紀至明治六年紀) 213-214頁。
6) The Japan Daily Herald (1881.1.21号)。
7) The Japan Weekly Mail (1891.12.12号)。
8) 「官雇入表」(自明治九年)。外務省外交資料館蔵。
9) 拙稿「西郷従道邸とレスカス」(『明治村通信』NO.156, 昭和56年6月16日)。
10) 『横浜成功名誉鑑』664頁。
11) 横浜開港資料館蔵。
12) L'Echo du Japon (1877.1.2号)。
13) 「大山文書」36-(1)。国立国会図書館蔵。
14) 同上 36-(2)。
15) 同上。

- 16) 『三菱倉庫七十五年史』 11頁。
- 17) 『三菱社史』 7 卷, 504-505頁。
- 18) 「朝日新聞」(明治15年 1 月28日号)。
- 19) Etude sur les constructions japonaises et les constructions en général, au point de vue des tremblements de terre. (Extrait des Mémoires de la Société des Ingénieurs civiles)。
- 20) 「清水方建築家屋撮影」(明治26年12月製)。
- 21) 『横浜成功名誉鑑』 665頁。
- 22) 横浜山手外人墓地のサルダーの碑文による。
- 23) 「私雇入表」(自明治九年七月)。外務省外交資料館蔵。
- 24) 同 上。
- 25) 「東京日々新聞」(明治13年10月 4 日号)。
- 26) L'Echo du Japon (1880.10.5号)。
- 27) 筆者蔵。
- 28) The Japan Weekly Mail (1882.7.1号)。
- 29) 同 上 (1884.4.26, 1884.5.3号, その他)。
- 30) “Japan Punch” (1884年 5 月, 1884年 9 月号)。
- 31) L'Echo du Japon (1885.4.20号)。
- 32) Bigot, “Potin de YOKO” No.8 (1891)。
- 33) 「貿易新報」(明治38年 4 月 3 日号)。
- 34) 横浜山手外人墓地の第13地区の崖下に土に埋もれた形である。
- 35) 「敍勲」二, NO.29 下 (明治26年)。国立公文書館蔵。
- 36) 「太政類典」第二編第一類官規十, 賞典恩典八上, No.3. 国立公文書館蔵。
- 37) The Japan Weekly Mail (1874.4.11号)。